2024 年度
第 11 回ブックショートアワード

# マンホール・万歩 HOOL

香久山（かぐやま） ゆみ

■作品タイトル・・・マンホール・万歩 HOOL

■元にした作品のタイトル・・・なし

■著者名・・・香久山 ゆみ （かぐやま ゆみ）

■あらすじ（140 字）

夫の趣味はマンホールカードの蒐集だ。夫はカードにしか興味がないから、私がいなければ観光さえおざなりだ。夫に何かあれば、集めたカードを売ってやろうと思うのに、夫ときたらカードに書き込みをしちゃってる。売れないじゃないか！

■文字数・・・2,906 字

「この井戸は、かつて利休が炭にした椿木を底に沈めたことで美味い水となったといわれています」
　ボランティアガイドさんに解説してもらっているのに、夫はきょろきょろしている。まったくこの人ときたら！
　堺に行きたいと言い出したのは夫だ。
　それならば、当地出身の千利休と与謝野昌子にまつわる展示がある「利昌の杜」という施設に行きたいと言ったのは私。利休時代のものを再現した茶室や、茶道のお点前を拝見してお茶をいただいたりと、学ぶことは多い。今も施設の隣の利休屋敷跡を見学しているのだが、夫はずっと興味があるのだかないのだか。
　せっかく来たのだから、しっかり満喫しましょうよと言うのに。「博物館とかは事前に調べた内容を浚うだけやから、そんなに見るもんないよ」なんて平然と言う。この人は、マンホールカードにしか興味がないのだ！
　マンホールカードとは、ご当地にゆかりのあるデザインマンホールの意匠をカード化したもので、全国各地で無償配布されている。これを集めるのが夫の趣味だ。ちなみに大阪の堺市では現在 2 種類のマンホールカードが配布されている。
　受付で南蛮船と旧堺燈台をモチーフにしたマンホールカードを貰うと、もう満足したようにさっさと次へ行こうなんて言う。もう！
　夫と並んで東へ向かう。徒歩 30 分程で堺東駅の観光案内所に到着する。近くに美術館のあるアルフォンス・ミュシャの「黄道十二宮」がデザインされたマンホールカードをゲットする。この絵画は私の趣味にも適っていて正直ほくほくだが、夫に悟られるのも癪なので黙って定期入れにしまう。
　私の無表情にようやく気付いたのか、夫が「パンケーキでも食べよか、好きやろ」と言って、近くのパンケーキ屋に案内する。マンホールカードにしか興味がないくせに、リサーチ魔なのでこういうところはマメだ。食事系とデザート系のパンケーキを各々頼んでシェアする。
「次は、百舌鳥古墳群やな。ここからやと 30 分くらいか」
　私達は歩く。歩ける距離ならば、バスなど乗らずにひたすら歩く。
「商店街に、カードになった以外のデザインマンホールもあるみたいやけど、寄らんでええのん？」
「ええよ」
　夫はあくまでマンホール「カード」の蒐集家であり、べつにマンホール自体に興味があるわけではないのだ。へんな人。
　そういうわけで、先程堺市役所の展望フロアから見た仁徳天皇陵を目指して進む。
「古墳カードっていうのもあるみたいやけど、どうする？」
　立ち寄った古墳の写真を撮影して引替場所で提示すれば「古墳カード」が貰えるらしい。口振りでは夫は特別興味があるわけでもなさそうだ。まあ、堺に行くなら古墳も見に行かないと！　と言ったのも私である。私が言わなきゃ、夫はマンホールカードにしか興味がない。
「うーん、一応もらっとこか」
「オッケ。なら、こっちも寄っとこか」

と夫に誘導されて、道を一本逸れた反正天皇陵古墳に立寄って記念撮影する。古墳カードは全 67 種類あり、内 28 箇所が堺の百舌鳥古墳群の該当らしい。
「まあ全部は無理やけど、回れるだけ回るか」
そう言って、夫はリュックから地図やらメモやら取り出す。夫は荷物が多い。
「お前の荷物が少なすぎるんや」
と夫は笑う。私は肩から提げた小さなポーチだけ。だって、足りないものは大体夫のリュックに入っているもの。
夫の解説を聞きながら、古墳群をぐるりと一回りする。
「はへー、さすが学校で習った通り仁徳天皇陵は大きいわ。でも地上からやと前方後円墳の形が見えへんから残念やね」
「これで確認できるやろ」
博物館で貰ったばかりの古墳カードを指に挟んだ夫がにやりと笑う。確かにカードには上空から撮影した鍵型がきれいに写っている。
夫の案内で、古墳をモチーフにしたメニューが展開されているという近くのカフェに立寄る。今日も本当によく歩いた。やっと一息だ。
「ほんま、あんたのマンホールカードの趣味に付き合うてたら、ええ運動になるわ」
「ほうか」
夫はにやりと笑う。
マンホールカードは現在全国で 1,076 種類も発行されている。休みのたびに出掛けたり、旅行の際も行き先に特段希望がなければマンホールカードを目的地選定の基準としたりする。そうしてコツコツ集めるけれど、さすがに全部コンプリートするのは不可能に近いのではないか。長い年月かけて取組めるいい趣味だ。まあ理解はできないけど。
「あんたが死んだら、集めたカードまとめてフリマサイトで売るからな。なんぼになるやろ」
冗談めかして言う。
「ええで」と夫は言う。けど、私は知っている。せっかく集めたマンホールカード、夫は全部のカードの余白にペンでメモ書きをしている。「〇年〇月〇日　幸子と利昌の杜、パンケーキ美味かった」みたいに。
「そんな書き込みしてたら売れへんやん」と言うのに、マニアのすることはよく分からない。一緒に貰った私のカードの方がそのまま引出しに溜めていってるだけなのできれいなものだ。
書き込みだらけの夫のカードと、新品みたいにきれいな私のカード。出掛ける度、うちに 2 枚ずつマンホールカードが増えていく。
ずっと、ずーっとそれが続くと思っていた。だって夫婦ともよく歩くし、健康には自信があった。
けれど、2 枚ずつ増えていたはずのマンホールカードが、1 枚になった。
メモ書き付きのカードだけが増え、新品カードの枚数はある時から止まったままだ。
ずっと夫婦で集めていたけれど、今はたった一人だから。
「メモ書きしたら、売れへんのちゃうんか」
夫が苦笑する。

夫に病気が発覚し、治療のため長期入院となった。

毎日見舞いに顔を出す私に、「俺のこと気にせんと、お前もちゃんと息抜きせな」と夫の方があまりに気を遣うので、たまに一人で出掛けるようにした。その度にマンホールカードを入手して、夫に倣って簡単なメモを書き付ける。「〇年〇月〇日　風光明媚だが本来桜の名所らしい。春にまた夫と再訪したい」

あんなに「メモ書いたら売れない」とブーブー言ってた私が書き込みを始めたことに夫は呆れ顔をする。

「ええの。だって私はべつにマンホールカードに興味ないねんもん」

「ほな、わざわざマンホールカード集めに行かんと、好きな場所で観光を楽しんできたらええ。お前、そっちの方がええやろ」

「私べつに観光が好きなわけちゃうから、どっちでも一緒や。あんたと一緒なんが楽しいから出掛けんねん。ついでに回れるだけ観光地回るのは、関西人のもったいない精神やわ」

私、調べもん苦手やから、マンホールカードの行き先検索するだけでも一苦労やねんで。だから早よ退院してや。

そう言って、どれだけ一人でマンホールカードを集めただろうか。

長い入院の末、夫が退院した。

車椅子の夫とともに、旅をする。ゆっくり、ゆっくり。カードは千種類以上あり、行く先には事欠かない。

マンホールカードを入手したら、観光もそこそこに、夫のリサーチした飲食店でお喋りする。話は尽きない。

「次は、ガンダムモデルのマンホールカード取りに行こか」

「私、セーラームーンとかベルばらのが欲しいわ」

テーブルの上には、二枚のマンホールカードが重なる。

〈了〉